

## 勤皇僧侶・竺道契



圓通寺



竺道契肖像画(圓通寺蔵)



道契の著作・原稿(圓通寺蔵)

幕末から明治時代初期に、圓通寺(寺和田)の住職を務めた竺道契は、文化十三年(一八二六)、備後国深安郡神辺村(広島県福山市)に生まれ、十一歳の時に持宝院(笠岡市)で出家し、道契と名乗るようになりました。そして文政十三年(一八三〇)に、阿波国(徳島県)に遊学し、以降は京都の智積院・勸学院を手はじめに、厳島の弥山や比叡山などで修業し、様々な宗派の奥義を会得しました。

また、仏教だけでなく、経史(中国の古典)を和歌山藩の儒者・仁井田南陽に、文章を漢詩人の森田節斎

に学びます。節斎は、勤皇思想の篤い人物で、京都に塾を開いた当時の門下生の中には吉田松陰や久坂玄瑞など、錚々たるメンバーの名が見られます。道契が後に勤皇僧と言われるようになったのも、節斎の思想的な影響が大きかったものと思われます。道契は、弘化三年(一八四六)、圓通寺の主席として迎えられ住職の

座に就きました。そしてこの地で寺の興隆に努め、田園を開墾し、寺子屋を開き地域の子供達に漢学や書道を教えるなど、地域の発展に力を注ぎます。一方で著述活動も好み、「続日本高僧傳」をはじめ、多くの仏教研究に関する書物を書き著しました。

さらに、この地域の勤皇の志士である医者・漢詩人の河野鉄兜や、後に津山藩権大参事に拔擢される鞍懸寅二郎、貞永寺の豪農の生まれでありながら、勤皇の志士として京都で活躍した桜井頼直らと交流しました。

桜井頼直については、彼が京都にいる頃、討幕派の黒幕であった公家の岩倉具視の家に起居していたことで幕府から嫌疑を受け、作州に戻った際に道契を頼ると、道契は自らの僧衣を脱いで頼直に与え、髪の毛を剃って僧形で旅立たせ、幕府の追っ手の目から逃れさせたという逸話もあります。

明治時代初めの廃仏毀釈運動が盛んな時には、仏教関連の施設や神佛像などが破壊されていく中で、道契は大宮大明神(大美彌神社)にあった神像を圓通寺に移し、保護したといわれます。こうした仏教界への逆風の中、道契は京都大覚寺に勸学院(学問所)を開き、その大講主となり人材育成に努めます。そして三

年後、再び圓通寺に帰り、津山中教院(教導職〈宗教官吏〉)の統括を行う機関)の学頭となりますが、明治九年(一八七六)に病のため六十一歳で亡くなりました。

その人柄は、ある時檀家の者が道契を試そうとしたところ、その魂胆をすぐに見破り「天下に俺を試験するほど偉い人物がいたらお目にかかりたい」と豪語し、寺子屋で子弟を教える時には、檠の棒を持ち、不心得者がいたら遠慮なく殴りつけ、あだ名で人を呼び捨てにし、鷹揚極まる人だった、などという言い伝えもあります。一方で自己の誤りはすぐに認め、優しい面もあり、寺子屋では誰一人不服を言う者なく、一同いたく敬服していたといい、豪快な性格と卓越した知識と行動力は、人々の人望を集めていたことが窺われます。

竺道契の肖像画や書、著作等は圓通寺境内にある鏡野町郷土館に展示しています。機会がありましたら、是非ご覧になってみてください。(※見学の際には圓通寺へ事前連絡が必要です)

参考資料:「岡山県歴史人物事典」「岡山県人物傳」  
「隠れた勤皇僧 道契上人」「山陽新報」  
協 力: 寶壽山圓通寺

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733